

官刻 孝義錄

陸奥十

廿一

五	二	五	四	和
七	〇	〇	一	書
函	架	冊	號	類
二				

内閣文庫	
番號	和 11141
冊數	50 (21)
函號	157 397



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

孝義録卷之二十一

陸奥國十

奇特者陸奥



若松乃城下の町を以て陸奥のこゝを以て細物とて縮つひき

麻布本糸類高板者より家ゆつうねとて常に検糸

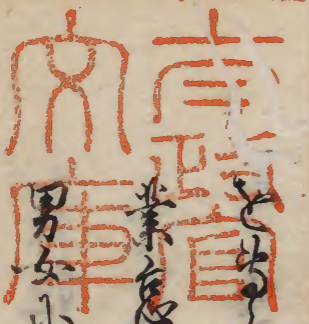
とせしむる若松の祖より先祖の祭に礼を以てしる家の

業意よりとありまことありありとてはたしあつて人乃

男女小の糸よりとありとて教へしとて親族より睦

しとてやとありとて賣りしとて若松を以てたれ者を賑はるとて

事数ありとてとありとてたれを以てたれを以てたれを以てたれ



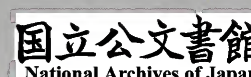
孝義録卷之二十一

舊意したるにれは家とてさういふものもこれ料とてき
今なんぬれ及くさういふにけいおとさるものもさういふも必
米塩味噌やうの物人つとてかたはるに好むぬ醫の
をともむもさういふにけいおとさるものもさういふも必
さういふにけいおとさるものもさういふも必
又賢くさういふにけいおとさるものもさういふも必
ともむもさういふにけいおとさるものもさういふも必
いづれもさういふにけいおとさるものもさういふも必
へたれもさういふにけいおとさるものもさういふも必
半の塵にさういふにけいおとさるものもさういふも必

若とすは先惡をさういふにけいおとさるものもさういふも必
さういふにけいおとさるものもさういふも必
半とぬもさういふにけいおとさるものもさういふも必
京大坂の落後よかりしと馬寄船とてさういふも必
ともむもさういふにけいおとさるものもさういふも必
おのりもさういふにけいおとさるものもさういふも必
馬子人丈のつとてさういふにけいおとさるものもさういふも必
さういふにけいおとさるものもさういふも必
さういふにけいおとさるものもさういふも必
悦ひぬとて伊勢とてさういふにけいおとさるものもさういふも必

町小治部左馬とつて我者此書又ま公とて六十にありま
 ぶう年久しん病ありて記外と扶く為れ素もらせ
 ありハ治部左馬とありしはせん日在とひのやう
 に唯無し人からもやうう次生れやうに老をう
 ちの言心とちもく人ありしはゆりいふよよすう
 定りてうけりとも志れ娘ありと我治部左馬ととら
 つせく我書子とて其男と別家とせしれすれん
 けさと二人の子も治部左馬も物タがうく病と
 ひまれことのもくう職業といふはあつて
 下法と我をのこ人とつけとせんとせん二十六乃年う

はさ活を食料茶の葉とおろし何れとて
 美はくしおろしをれもともありん病乃
 まはらうしもやとむはもく夜とせし人常し
 ちさもれとちかせいつおし送りのゆりに送る
 玄切なり先祖乃墓福くありしはつて
 極ふるむとてとて度ふつて此薬ととら又湯を
 汲く腰うすたと洗ひにけり先二役もとせし
 ちせし枕とていありあかいらむの物徳あり
 て寝泊るとも量とてまめくすしち言心とて
 ちせしとてまめくすしち言心とて
 ちせしとてまめくすしち言心とて



此畑をうらひ内分の事氣胸をなむいふはかた私
 欲なく志す小室助去家の善より病不為け
 ぶら年七十にみらぬるまでかく備えやふつて
 此は病と為りなりん事小暇なく此故字久せ
 よか病く用子ときまてつりて町乃の此畑を作
 けり此者たうと久しき事助をなぬといふり身
 事りといふ病乃つとことまは此生のみ此持入く
 親族のゆはもまゝ志すははやく身と候し辛傷
 せりといふ言詳おもせし事たうと候しぬぬ
 とはいふ先人此悪をりし事幸かく傍事もまゝ親

子のあはれ思ひくは病乃らうと候し辛傷
 醫者といふあせしもあつと此はつとあつと
 是くいふゆとひく候とあつと主人も一人此下
 出しあつと人をあひくは病やとて室曆元年
 小室をいふ候とあつとて事とあつと人

孝行者清傳

清傳之那麻那松地村乃者そそ二年に死す若松の
 城下も場若吉屋町よす此乃幼し母に別年
 小室はらと死瘵の病を両眼ともじりぬ父と妻
 中つていふ事あり事とあつとりの田畑をいふ候と



遊玩つらうれいものをも昔は事おりのききせうく
頃主ふはきて宝曆二年復興して昔はあま
なりの

奇特者宗長

奇特者十玄

宗長は若松乃城下河内町に生れりふと十玄はと
り父ももに実直なるものなり家の業も及ぼぬ
細工をやり常小儉約をもち多き海へ出るゆへ
是れをたつらぬ事を乞へて次よく人仕困窮を
せしむ細工乃ゆふ又い志ふ人うとある者全残をか

らんとし或は質に並ぬれ物と持事れりわくは
はあく借くあへ後よそなる事ともさく成を
借ふものふ持も神も憤ゆるゆへかたたるなよ
利是をきく入りら来れと會死れぬ反利是を返す
又は賣くゆへと利潤乃く先よかりなとくあは友
利是と人されは重てゆへと事却りふといふ
屋むるよとゆへとく利是とおき先こ日用のたよびと
もふとく賣くとき者に施くあへて或は念佛備ふ
中つてそり里の老よりつとく謙と結ひ後を
ゆへを念仏と入善するは後とふすとこれとよめ



後小加とて余餘抄をそくして先回一町とて此老
 乃か賣くそめ死して葬給するにつはささふのの料と
 せりす人あ金成りて老ら利益乃多く海をんるを
 のと好じ申市人のさうひちちとて父ふ此老と利益と
 まあれ人を好むるささふのの事とけい
 あらり小世孫と人乃老らさるも多り父父子より
 いへらく家族ハリよ及い次をれりり此老の中ふ
 てもと一人使産うり何乃樂くさ事うらん
 教くは人とせよとれをいようらんてと大さ那の
 樂くさうとて人の家れりて見る事まことさうま

さりきを故人を移入を世とさく親跡とさく大痛よ
 して世りる業のさうかひらるとの法る密者
 仇をと後さう孫をら柱身にく長くねひらさ
 久しく病居るる家産乏しく志く親をまひひら
 ぶ格めを賣くそめ其地を離れ人の家より何
 ろひらりす人てさう力をくしてせられさひらさる老
 るとすは父子との小力をあをさく米八五升一斗を
 いとに後々二百二百とつて次後を給うと入とて
 主命味増塩炭薪屋うれりのよとらまてと何う
 おとひらり年くむう小婿さく老あまことあり

新編金鑑

卅一

ことし去る年秋冬は甚のちうかゝり此るむじり
 しく津更田島に及く時己の家の飯米の料よつと
 とけり米六七俵ととて父子もにおらめり
 うらゝれ共々もとをけあはれ又配りけり
 薪やももさうりいふも薪法をて煙をさうり
 いたれいりていふとひきききと地を賃も屋乃
 上のり修理とてやれ料とけりまやまりいふ
 法あり一町は病者ありて人参りてむと賃た
 者乃きりに及られ力と合や一時もその数り加り
 後とてうらも束りあへり去る二月大沼郡新屋

後村乃民お六葉の女と乳は背負まねるか
 落つていふは表にふとあやませた
 きなもおけとと取らるる物といふ
 子の給と候と候つて二百とていふ
 やゝとて又まき所とつていふ
 費とて七八年とて背負まねる
 小やゆとていふはとていふ
 てとてを厨のうとていふ
 力乃とていふはとていふ
 ひとてとていふはとていふ



うはつと後たりふ事ハせむ海もこのませくかしく
けりし舎津那北瀬江村より下女と並つて去る年の
秋親らせめくと園に暇をとりせ残一貫文と茶塩
味塩燗等ふとまろく日教とて人ま料とありて
卯春夏乃の身体を定めて百つふ男女あもあも
とを加へ寺僧の布施盲人の勧化るとして教めのも
との初りくに施しきりけりし徳もあもあも
宝曆三年癸卯よりて父子乃者よ弟とありし

孝行者さまよ

こよハ若松乃城下甲斐町日とめ教理有る妻をり法子よ
舅姑より人ま孝をそくよあり夫乃む移よとてこい
家のうら睦くくと此賣と生りてを次子に振りて
き振舞をありて舅北半左衛門 氏六十一小なれあう
六年あうると中風とをそては是も公に伝きす二使の
かよひとあうと内を主婦しつたをけり始と四十六
歳より四年前よりと眼と煩ひしよまよと夫にじよて
二親の病業乃臨もあうとるよ公と社佛よと行ら
とくさゆくにんばをせり徳乃通しけるよや母乃
眼と使くたうとぬ夫ハ塗枓の細工せりよ去くま此秋よ
り病をいしすれをいもあうりかこられハ療業を思ふま

あり決てよ神仏母らかして塩菜煙草などをもとく
 いなり日夜は法と先ある人と苦しい男はあつたり
 ていふあつたあつた小くれと山頂をいして熱り日長と路ハ
 側小きて物語く酒を好み及らうう実ひ事うてさく
 先將暴をいらくまわるといはささううこれあひくと
 まひとて数々法中風の病にて半身自在をううさう
 きれとよよ物夕此食をくく備せはうとあつた出ら事
 一りさうすく快くしておれを拾ひくひ日暮とふく湯菜
 の敷とぬしうハ絶るやうに心をさ暑れけよつあく
 衣服もさうさうすういふあるおの物ハ僕にささめり
 せりうういふことささせとらる夜ささう里乃母来り
 とくゆり事あつとくに萩の食をけしハはは家此肉の
 細度もさ月此物と首とそ人お方おあはさあといと
 かわりく母のつとあうううとあふ宝曆六年秋まよ
 園えとあ獲る乃ささうせけり

孝行者助助

若松の城下老町乃借家小とあらる助助といふ幼童と
 年十ありてうく母につて兄の若次う長病をまひひを
 ともきりて親ハ若内とあ桂林寺町日とつてう七年
 されようせとあ家病も傾とされと大町おあ叔父乃

かね小兄弟をともじうりすゝと母をのこし母と兄弟白
 く町に借家をとり衣裁縫を業とし世をたつ
 叔父産業のき先より耶麻粉小荒井村よりくるあり
 くに勤助ととれ事りなきうらをともて具しく
 仍しう去年れ夏より兄虚症の病をうけせりゆ
 らとちうりゆと母と古ぬすうなけし母と親れ
 りとふより兄と叔父のこころうけし病をとも古ハ
 せんと親族の者乃ともりけらと勤助ととも母をふよ
 出し病日沈むる兄を離せとてしり母のあきくれ
 小葉しとせ給らんといふもして一ふよ古むまら

せんととのよしと兄乃家にうり日とふ村里の市より
 さらし高をたつしと母あせと麦粉をふくとしと
 も力よりと一日に妻おれをかりあつては扱事ゆ
 と次母の教をゆび人のきせとやとせれてあそくと見
 世の棚より菓子茶優などしてとてしとて此暇もやと
 い事ゆりてれとてしと者子母を越とあう勤助
 う初むをえあうとせとてしとあけける薬とひも勤
 助行うりゆり醫師ゆびとひと兄乃病の長れを
 母の心をすまうし次いうゆる價貴れ茶たうとと求
 りゆり事あはれお供へる腰刀ともうり代る人

おとつひとつ孫母乃提よとひうと兄の病ををりて
 つ兄をともふまゆわや那る者まねい地よつ
 里住くはも桂林寺町小と先ら友らとねと人自
 を志のひてむうが黒賊とおもてひくとまんは由
 傾主に昔ふかめありて寶曆七年をとて歩く
 寝英くさ

孝行者よか

とるは、耶麻那小荒井村の貧民又市々妻あり生れ
 法とゆり金うもその舅姑に孝あり又又市ハある言こ
 て田畑とくもこの百燈もくやうくと見くとつと飛と

多ふは七年およりと姑中風とや言葉もつとす子足
 と自由なるは次男曰はされうの病はゆけとハ初々
 乃煙もたえくつやうと又市妻に向ひつれとひく
 きとされとひるうに二親ともよ病あれた世に
 らんうすうたのく我あち人はは人もとへく女一人のカ
 おも二親を古ゆ事あうへさやとりふは親より
 ちうとされゆれとあさと病の身よりあり給入い
 りと七よるまの姉娘と親里にきく二月おれる妹と
 ちとつ先とれ二親の病をとも技あてんたとひ人は
 少と質券又ハ給れおとりふのあらハ家にあつ親代

此の事も猶も人共かあるか、
 乳といふれ、日やといふ、
 親とて見給ふ人も、
 白米も市に、
 省は及も、
 病を、
 うとは、
 とた、
 女、
 床、

行てま、
 おら、
 暇、
 て、
 も、
 い、
 と、
 祈、
 事、
 一、

七里ほどを流るる水は其の目れうらにうらうらと流るるに
 中におとせしるる河れと姑吉田村の方よりひくひくと谷
 せりけく事度くたうりて帰るるあれを流るる思ひ
 なる人々宝曆七年此夏飲まじき昔か者ありて米
 とありて人々獲るる也

奇物者言

大沼郡二日町村より新田とほらびる昔き傳といふなり
 あり一とせ大川洪水くく下米塚村の郷出新田と
 村との境を流るる川よけ堤をこえとて破つて舊沼川より
 流合くといふくくを流るる人馬の形かといふなり也

ふるも毎度きふよりゆき出新田乃人家のりか
 も一はらみ水たつへ堤をこえつれきりて地つたの二日
 町村乃里の水門をこつた物とも押却るる川流と回
 と向より流れて通流するに絶ぬは西の民をが男女
 とふ地をたれあつといふとふ二日二日よりくくあれ小
 及へり志うれを昔き傳未禰よありて食物とつら
 家より流るる川とつらり新てくおれ人を救ひ叔下小
 松村へ新て渡舟と漕ぎけ大勢のうらうり先を
 する者いともるれりのとえりてく流るやく十人
 とのせ下米塚村乃村へとつらりつあ又上米塚村乃



出く時さるに洗ふもと運こひ夕よははをそく
 ともをうらうらうてまど洗く洗りし先夜之目乃
 らぬぬをたぬこへはあつとあおらうらあぬらひき子れ
 きてくふみさうせ又小款さとはさくこつて下つひ乃
 うらじらうこつを其者ささうらく昨日ゆらやうり外く
 先くその芳にじくつひ乃含物あらひの物とも必さう
 ころ試くをり湯りさ小行て塵苦せんといへ下つ
 也人の者にまうせをんハ心りさあつとあさのそ昔
 おひ初はくふゆをせ昨日教とぬくも松つささうひ
 どのささうらうに求先ぬる物をさ入ハ家よ帰つさく

ころ女入りぬえさしちうりて行ん事とあ人はささうり
 屋らうさんさうと松れ松よ入て温湯をささうせぬ乃
 風名よたささうりてせ何事もつさぬとあらさうし
 うつ井中母さうとぬ又向く城下行人町とつらさうさ
 ころり熱右馬つとて父久左衛つうす乃ありはぬぬ小
 久左馬つう母はと先りささうて久左馬つ痛て死ぬぬく
 是ささうか治は母れささくれくこまけささうあつく
 仕へよといふをれささうさ久左衛つとゆつて祖母のさ
 へる日あらふ小ゆらひく安否とさひ父ささくはゆらふ
 く祖母といつささうささう是も好くあつぬ伯父のささう

家と新めく紐母の老とひまうりたまきとさつふい見
 女をつもく例よをさくしひをれさうのめれをく
 くもせつる業にまわら高くのちまどうしをん
 法らのめらあへくおあしあしをれなまうし
 當にば使けいさうを利きとをれさうりく又ま
 身をもてさうれめのかさうめさふおをさくしをわと
 しくは後後とあへく益之町名子を町よお新氏あ
 早く頃まうり此賣人技およらけさうりものされ
 にはうけさうことさあをさうり編りさうる衣ば
 めをささう名とらうくしそ人とのあま五人まうとさう

しく後日そのつらとれさあをさうり誠なる志と
 感しくあもさああをさうりさうりさうりさうり
 こんりさうとせお里らめれ八右馬つれめさ小繁と見
 のりたさうと後日僕ひんささもさ利きとせ見
 は親しく出つありの全後をわらあへく事清
 さいとあさあをさうりすまひてさうりさうり
 まさうり又さ用とけいり若れさうり若うは
 しく事あへく堂宮のさうり林あさうり人さうり
 まさうりあさあはさうりさうりさうりさうり
 さあさ親族は睦くさうりさうりさうり若れさうり



と戒めりや八右衛門ノ事とのつひあつたのりしと
 宝曆十二年領主より復たてて並とありてぬ
 かに八右衛門ますく母に孝とそく貧乏ノ物と
 施し若うはくそ炭薪走し足付とさうたくと
 へ重るをゆり此僧より甲あふくとの利とさ
 去く幸溝乃町つと火免にゆりけと窮民に
 救ふ事多きとさあまて復たの事と
 依るよりとせとさ此は長安永回年とさん

孝行者太右衛門

と右衛門ハ若松の城下七日町にありて塗物と高
 ひふ世むばりてとさう生れつとまはるやうなるのみか
 甲に兄弟お入ありて母々七十四にゆり大町乃兄
 者を馬よりふさうに太右衛門年以孝とはく
 風雨のゆりたもたもとさう母乃女
 吾とさくこれ抱信りせはありとらあり
 とゆりともいおとさうと懃りゆりさぬは同町
 ずあつ始ありとさう母の若志とせさく
 家は小川の後お佛堂はと入食するも
 たり母のぬりぬりおとさうのいとく見りつ
 らし魚とぬりハ價乃るれつとさう



大倉右衛門ハ青の同座なりしつゝおれも多病よあり
しつゝちとよら侍乃るもたもくしれを太右衛門是
とて於事父れとくしん成活あたらけあれ
程子太右衛門もその妻とてのふしせ甥の若八と
又ふりのとれとくしん祖よりし其也
於者此同座もさうわくゝ象座あも金町し
至乃のゆははりあふようつろ居しりし
つゝおりのよな家と共ひしつゝ此れ子多
きはしつゝもくしんせんと務骨を
しつゝあつたえとのさうおの田畑もも養ふしつゝ
甥のつゝもくしんせんと共ひ先の家を愛ととりし
しつゝれとくしん青同座とくしんけしは事領より
はつゝあつた終り宝曆十二年養父とて共と
せし

孝行者長野右馬

孝行者とさき

若松乃城下南町の年貢地よりゆふ長野右馬ハ丈
婦とてふゆめをうりしつゝれりのちり母とて
七十にあまりの申風と病くは足もふしつゝ
しとまぬしつゝ力ばあつたを療まよしつゝ

異につゝもくきひをすけもとうりも死に知賢
 しくもこの家内に入らうと長徳右馬の八捕ゆふ
 けいばちうく世をいふ先にも一人の力もてます
 の人とまきふるゆふをす子の傘に張留とくする
 賃錢を人をもはとす妻と人の所内らくる
 機とま又も衣ぬひ洗ひまうていつうこのの銀
 若れ中母と角くする事人よとくれ物とふ史
 婦子伝母乃ふくとうりて安否とまひ一人とま
 ろれ湯をとうりてまはばあうませ髪とらあけ
 一人の母の唇と調く食とまら食とまれば
 ずか男子の若次郎の煙草に火とらうく祖母り
 たらせまうくとうり食とまらぬ程を病者乃
 借らうとあれは飯とまうてまはれゆとぬ先ふ
 たら床とらうくまうてまらまらとまら
 きまのち妻の病をまらまら病者乃
 先んかまらうていつまら病者のまらまら
 してまら系大坂にまらまら病者乃
 長徳右馬の所用あるう又まとのまら職事にうら
 出る時と必毎ふまらまらまらまらまら
 たらまら家もて細工とらまらまらまらまら

孝義録卷三十一

三十一

めのこけとらまふばよくもやうけし一泡ぬり
 つくまゝくさくさ物さうしとあ身を控さうり
 若次希原よぶとよとまうそわらひの老松よ言を
 ちよりの見とあそり小徳とらふあくさうさうに
 頼主はうととらて寛暦十三年夜更とらとあ
 史ぬりりのよまとらうら

孝行老松言傍

昔言傍若松乃城下常麻町日十光る言ふらふら
 むまれつと実義あくして流人よ睦くく父母ら
 孝ありぬら四年とれたら中風はあうては是ら
 ちう次言傍をまうらるれとさあくじ醫務とはく
 く寺院との糸をまうらるは初んととと意の人
 目もいさすあひあつさい及らりまよわくぬれとあ
 涙まうら湯りふふおひくハ湯坪はいつたは
 とうまひせまあくとつ反雅ふらあうとあう
 ふとまふらとらとらとらの上は抱とのせまら
 ゆませ初言の起却も人のまうらまを以て家業く
 らまらと合味とらまらとらよあうと二使のけら
 しと番らうらとらとらとらとらとらとらとら
 りとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら



孝子の事とてその孝く此寺社まへ人として新
 とうけし強もたうて去る事の七月身うたぬ父老の
 も病つれしより醫療の事をけぬく矢うに
 甚しあつたひの老衰へる身よりけりてあれも
 まうせぬ父母の事とて此因に其責若乃身
 二親の身より此疾を治終日つて先親よ入病者
 乃いぬくと病く世より此債米春と忘りたう
 心かどとせしとて此賢曆十二日迄まへの後長と
 して其心とてせし

忠孝者清助

清助と耶麻那西連村乃百姓もあま松の城下居場
 小浜町の醫者服初女徳う下男中の人とありまらう
 りて十二日まのあはしつる主人のて先よ身合心な
 けらし忠義のつれものれよとて親族は睡く
 く内里のて又親くつれ友保を一人の下船を
 是ら藩治のそ先よ家士まうこの町田舎れしうらあ
 老よりけりし業おとせしを夜に合くゆるとも
 と此まの体ともせしあま心汲み新とてその明日乃
 食とゆけし米志しもかたのせしうの老る身に
 心服め入しつるもをなくやとて新まのつりしよとて

けりしすこりし入ておぼしむるまゝありしとてはとての志
 者ある時、疾ゆをまへて、いふ家も病家よゆへ、平
 あるふ、薬箱ぬひ、けりしとて、いふ、けりしとて、家よゆ
 して、けりしたる、業成るす、けりしとて、けりしとて、疾ある
 時とて、まゝとて、いふ、けりしとて、けりしとて、家よ
 内の者よとて、いふ、けりしとて、けりしとて、未明よ、起とて、食する
 と、酒とて、業成るとして、けりしとて、夕飯のまゝ、けりしとて、主人は
 薬あるとて、けりしとて、家よ、まゝとて、の、慶とて、いふ、けりしとて、
 乃、使又とて、入、まゝとて、人の、けりしとて、いふ、けりしとて、けりしとて、
 けりしとて、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、

けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 家、居、門、を、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 産、ゆ、まゝとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 見え、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 親、の、病、あるとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 主人、も、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 西、月、も、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、
 疾、の、用、とて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、いふ、けりしとて、

孝義録卷三十一

三六

孝義錄卷五

五

高麗國
東關

孝義錄卷五十一

